# アメリカの仏教の印象

小野蓮明

## 一

今年（一九八〇年）の九月から十月にかけて、私にとって初めての経験ですが、アメリカの各地を訪ねる機会が与えられた。私に果せられた仕事は、大きく言って二つあった。その一つは、アメリカのウィスコンシン大学を訪問するということ。そしてそれに付随して、可能な限りの幾つかの大学を訪れ、アメリカの大学における宗教事情、特に仏教、とりわけ浄土教、浄土真宗がどういうふうに受け止められているか、また仏教の学びがどのようになされているか、更には現実的にどのような問題がそこにあるか、等を知るということ。もう一つは、アメリカの仏教協会、つまり仏教寺院を訪れて、アメリカ仏教の現状を視察調査すると同時に、それぞれの地で講義・講演をするという、私にとりましてはまことに貴重な体験であった。時間の都合でその全てを詳細にご紹介することはできないが、思い出すままに私の感じた印象の一端をご紹介したいと思います。

先ず大学関係のことから申します。滞在期間が短いことですから、その表面のことしか分らず、深いことは何年も当地に逗留し生活してみなければ分らないと思います。でも私のささやかな印象、直観をもっていいますと、アメリカに果して仏教の学びがあるのかという疑問が私にあったのですが、訪れてみると、内容の深さ、その学びの是非は

別としても、確かにアメリカには驚くほどの仏教の学びが現にあるということ、また仏教を学びたいという希望が極めて強いという印象を持った。大学巡りの中心であったウィスコンシン大学の状況から紹介しよう。

私が訪ねたのは九月の初旬から中旬にかけてですが、アメリカの大学は九月が新学期ですから、新学期の始まりと同時にウィスコンシン大学を訪ねたことになります。ウィスコンシン大学は、シカゴより車で北へ約三時間余り、マディソンという人口約二〇万の小都市にあり、湖水に面した（マディソンには大小五つの湖がある）静かな学問的香りのきわめて高い州立の総合大学であり、全米でもハイクラスの大学であるという。九月初旬・中旬で、日本の仲秋より晩秋の気候であった。その敷地の雄大さは、湖水に面した校内の長さは約三マイル、幅は約一マイル、その面積は九〇〇エーカーという。大学の構成人員は、学部の学生は約二六〇〇〇人、大学院生は約一二〇〇〇人、聴講生は約二九〇〇人で、男五五％、女四五％で、そのうちウィスコンシンの居住者は七五％、教職員約五五〇〇人、事務職員は約七四〇〇〇人である。校内にはバスが巡回し、点在する大きな校舎の間に広がる広々とした緑の芝生には、昼ともなれば、語り合う学生達でうまり、夕方や土・日曜の湖面には白いヨットが数限りなく浮かぶという、きわめて健康的な学園である。土・日曜と連休なため、金曜の夕方から夜にかけてが学生達の最も楽しい語らいの時のようである。しかし、それ以外の日は不思議なくらい静かであり、街のいろいろな商店も、恰も学生達の勉学に協力しているのかと思われるほど夕方の七時には早くもシャッターが降されるのである。七時といってもサマー・タイムでまだ明るい時である。その限りでは、街全体が学園の街であるといえよう。

驚いたことの一つは学生寮の充実である。円形ビルの男子寮（学部学生）は、私が滞在したホテルよりもはるかに大きい。静かな林の中にある女子寮、それに日本の一戸建て乃至は二戸連立式の市営住宅を思わせるような大学院生の夫婦寮。院生寮は大学の敷地の森の中に点在し、物静かな緑にかこまれた別荘の如きである。その数は千数百軒という。大学院生は殆んど結婚しているようである。日本の場合と少し事情が違うのは、大抵の人は学部卒業と同時に

一度は社会人になるようである。そして、そこでどうしてももう一度学問をしたい人、或は更に高度の学問を必要とする人が、大学院に入ってくるようである。日本の場合よりも年令も高く、様々な職歴を経て学問に身を投じている人が多く、従って妻子ある院生も多いわけである。特に仏教学専攻の大学院の学生達は殆んど既婚者で職業歴のある人が多かった。その為めか、学問に取り組む姿勢も、或は思索の方法もきわめて現実的である。現実的であるが故に、厳しさも当然そこにある。恰も現実の生活が要求してくるような研究の厳しさである。そのことについては後に触れますが、私などが経験してきたような研究姿勢と聊か趣を異にしているといわねばならない。大学院生の寮の近くの林の中には、客員教授とか集中講義で特に招かれたような講師のためのハウス群がある。緑の中の色とりどりのハウスは、一見別荘か山荘を思わせる。

三、三一四、〇〇〇冊を蔵する図書館のすばらしさも強く印象づけられた。大学の図書館は約二〇箇所ほどに点在しており、仏教関係の文献は中央図書館にある。そこには数階にわたる大きな書庫、ゆったりとした閲覧室、貴重本を見る個人の読書室、辞書類の完備した中位の読書室、まさに理想的な内容である。しかもいかなる学者も学生も書庫の中に自由に出入りをし、自分で関心のある書物や文献を直接選ぶことができるのである。私はここでは特に仏教学関係、特に浄土教関係の文献に注意をはらった。それは、清田実教授が私に課した仕事の一つであったからである。即ち、仏教学関係の文献、就中浄土教関係の文献が充分であるか否かを確かめて欲しいという要望があったからである。

私が訪ねた大学、例えば、カリフォルニア大学、スタンフォード大学、シカゴ大学、ハワイ大学等の大学よりは、最も優れてこのウィスコンシン大学に多くの文献が取揃えられているように思えた。カリフォルニア大学も東洋関係の文献が極めて幅広く揃えられているが、しかし特に浄土教関係のものはここ程ではなかった。また、ハーバード大学と並んでアメリカを代表する私学の雄、スタンフォード大学は、政治学・経済学・歴史学といった現実的な面の学問が充実しており、仏教に関しても歴史関係の資料が詳細に準備されているが、思想的関係のものは比較的薄いとい

うことであった。

ウィスコンシン大学には、チベット大蔵経、高麗大蔵経、南伝大蔵経、国訳大蔵経、国訳一切経、大日本仏教全書等を始め、浄土宗全書、真宗全書、真宗大系、更には清沢満之、鈴木大拙、曽我量深、金子大栄などの全集乃至は選集、真宗史料集成とか教行信証講義集成という最近のものまでも限無く取揃えられている。ただ個々の著名な研究書で抜けているものもあるけれども、全集乃至は選集類で代表的なものは殆んど収蔵されている。もっとも、それらの多くの資料がただ収蔵されているだけでなくて、如何に学生達に読まれ研究資料として利用されているかということが問題であるけれども、少くとも施設の面では抜群だと思った。それはこの大学自体の仏教に対する、或は浄土教に対する姿勢の表れであると思う。

この大学における仏教学は、インド・チベット仏教学のコースと中国・日本仏教学のコースとに分れ、清田実教授は後者の主任である。清田教授とその指導下にて目下博士論文を準備中の学生達乃至は研究者達と親しく意見を交換することができた。私は滞在中、学生は十数名、どの人も真面目で研究熱心な人達であった。清田教授と何回か話しているうち、教授の指導方法の特質に触れることができた。それは何よりも語学力の重視である。中国・日本の仏教を専攻する学生に必須条件としている語学は、先ず日本語と漢文――これができなければ中国仏教も日本仏教も学べない――それにサンスクリット語、チベット語、フランス語、それからドイツ語、そのような語学を基礎要件として課している。特に日本語と漢文の読解力は相当なものである。因みに、今日の我々からすればほとんど古典の域に入っていると思われる、矢吹慶輝著『三階教の研究』、常盤大定著『仏性の研究』などの文献を読破する。日本語を充分に話せなくても、文献を理解する力を充分に備えている。大蔵経の経典の原典を図書館で一生懸命に読んでいる学生の姿を何回も見た。語学的な感覚は日本人よりも優れていると思われた。語学力を生かした仏教の学び、経論釈の文献の解読を中心とする仏教の学びが、その中心的位置をしめている。

## 二

最初の講義（演習）に出たとき、教授は今年一年間こういうことを学びたいという主旨を説明し、それについては既にこういう研究資料があるということを紹介する。図書館や研究室から既存の研究書、或は文献を持込み、チベット文献、漢文のもの、日本のもの、そのすべてを逐次網羅して紹介する。その指示された数多くの中から特にどの文献を選び、どれを中心に研究するかは学生達の自由である。一旦選ばれたものについて、どのように解釈し、どのように意味づけし確認していったらいいか、などの個々の問題を教授の指導に仰ぐのである。

日本の場合、特に私達の場合では、ある一つのテーマについて主題的に考究し、思索的に講義展開をするのであるが、アメリカの場合、むしろ主題について幅広い文献を提示し、その文献に意欲的に取り組むことを学生に要求する。そしてその為めには高度の語学力が必要であると。そのような仏教への取り組み方であるから、博士論文の主題として選ばれている資料も、例えば『仏地経』『金剛三昧経』『涅槃経』などであって、いわゆる経論釈の文献を論文のテーマとして選ぶ場合が多いのである。私達の場合も勿論、経論釈をその研究主題として選ぶことも多いけれども、同時に、或はそれ以上に人の思想を中心に選ぶ場合が多い。親鸞の思想、法然の思想、善導の思想、曇鸞の思想というように、人の思想を研究主題とする。しかしアメリカの場合は経論釈の文献を主題としている研究者が圧倒的である。しかも選ばれている文献は、浄土教乃至は真宗関係のものは殆んどない。むしろチベット仏教や原始仏教、或は真言、天台、華厳、禅関係のものが多い。では何故浄土教関係のものを選ばないのか、と問うてみると、殆んどキリスト教の思想と似ているからと答える。キリスト教と似ているが故に、あんまり興味がないというのである。また、何故『大無量寿経』とか『観無量寿経』とか『法華経』とか『華厳経』等の代表的なものを研究資料として選ばないものかと問うと、それらについては多くの研究者がすでに充分に論じ尽くしているから、むしろ研究されていないもの

を選ぶのであると返答される。従って、これまであまり研究されていないものを研究対象として選ぶわけだから、それは大変である。大蔵経との睨めっこが始まるのである。

私達の場合では、『大無量寿経』について様々な人が研究していても、それはそれらの人々の研究であって、私がこの経典に触れるのは初めてである。親鸞の『教行信証』についても、あらゆる人の研究がある、しかし私が『教行信証』を学び、『教行信証』に学ぶのは初めてである。そこに先達の研究成果や領解を踏えながら、私の了解を深化し徹底せしめようとする、そういうのが私達の仏教の学びである。そこには何よりも「道」としての仏教の学びがある。仏教を学ぶということは、自ら仏道に立つということがなければならない。当然そこには自己の内奥からの菩提心が要求される。自己を真の実存として建立しようという強烈な志願があって初めて、自ら仏道に立ち、仏道の学びを完うすることができるのである。ところが、アメリカの場合、そのような内なる志願が全くないわけではないけれども、むしろ現実には語学力を最優先させる文献研究が中心であるように思われた。従って、「仏道をならうというは自己をならうなり」と道元が喝破したような、道としての仏教の学びや、或は思索的な仏教の学び、換言すれば学ぶ者自身に仏道を開示するような質をもつ仏教の学びは、むしろこれからであるという印象を持った。

ウィスコンシン大学を訪れた日に、早速講義をする機会が与えられた。大学の様子も知り、研究生の方々の志向性もある程度知ってから、その機会が与えられると思っていたから、大変に当惑した。ウィスコンシン大学の前にカリフォルニア大学を訪れたときに、浄土教の印象について問うたとき、それは仏教の異流であり、しかもキリスト教と非常に思想内容が似ているという了解を聞いていたものですから、親鸞の思想の実存性、浄土の真宗は大乗の仏道の至極であるということを話してみた。仏教は本来的に自覚道である、そしてその自覚道は親鸞の場合非常に深い内観道として展開されている。そこに見られる親鸞の思想は、実存的であり主体的である、ということを強調してみた。ところが、——これも一部の人の反応であって、一概には言えないが——実存の思想に対しては日本ほど反応を示さ

ない。親鸞のあの強靱な内面的思索は、知性的な理解を超えて「むずかしい」ということであった。親鸞における主体の確立、本来の自覚道の成就を考えては見たが、どうも一種の違和感を直感したものであるから、アメリカにおける哲学はどうであるかを調べてみた。哲学の主流は実証的な或は実用的な哲学であり、さもなければアリストテレスをもって代表される如きギリシャ思想を正統としている哲学である。日本でもすでに実存を超えるような立場が求められ、実存思想の限界ということも叫ばれている。しかし、いずれにしても実存性、主体性という事柄については日本ほど敏感ではない。それは何故か。それは恐らくは近代的な自我性を最も強調する国柄によるものであろうか。

いずれにしてもこのことは、さきにいった文献研究を中心とする仏教の学びとどこかで結びついていて、決して無関係ではない。アメリカの大学では、総じて浄土教の研究は「これから」だという印象をもった。ただウィスコンシン大学では、はっきりとその萌しを見ることができた。清田教授御自身浄土教思想に対する深い造詣の念をもっておられ、またその指導下の学生にもそれが伝わりつつあるからである。そのような状況にあって、これから浄土教がアメリカに公開されようとするとき、特に大谷大学のもっている使命の大きさを憶わずにはおれなかった。それは一言でいえば、仏道の本来の立場に立った仏教の学びである。換言すれば、言葉の本来の意味における仏教の学び、即ち仏教を単なる研究対象とする学に簡んで、学ぶ者自身に仏道を開示するような質をもつ仏教の学びである。そういう仏教の学びを公開する使命が、大谷大学に課せられた使命であると思う。

仏教に関心をもつ教授達十数人ほどで開かれた昼食会に招かれたとき、清田教授と私とで大谷大学の樹立の精神と、大学の歴史と現状を紹介したところ、大きな共感をもってくれた。寛文五年以来の大学の歩みと、清沢満之、南条文雄、佐々木月樵の歴史的な事業、特に南条文雄・笠原研寿とマックス・ミュラーとによる梵文『無量寿経』の校訂、更に鈴木大拙による大乗仏教の紹介等の歴史的事業の今日的意義について語り、共感を得ることができた。人間存在の根本的解明を目指す仏教を「学」として世界に解放し、そこに真に主体的な独立者を生み出し育成することを期し

た、かの佐々木月樵の大学樹立の精神は、大学の歴史を貫いて確かに生きてきたが、しかし今こそその志願を改めて世界に向けて確かめるべき「時」であることを痛感した。

## 三

一方、そのような思いを抱きながらアメリカ各地の仏教会（寺院）を巡訪したのであるが、即ちサンフランシスコ、バークレー、シカゴ、デンバー、ロスアンゼルス、ハワイ等の東西の仏教会であるが、その巡訪に際し、先ず第一に思われたことは、言語・思想・歴史・風土、そして宗教性と、色々な点で全く異なる地で、仏法公開の大事業に献身し、親鸞の信仰思想を人間存在存立の大地たらしめんと努力されている開教使の信仰的情熱とその苦悩である。アメリカには日本のような歴史や伝統はない。しかも寺の数も少く、相談し援助を願う人もいない。拠り所は偏えに自らの確固たる信仰心と情熱的な信念だけである。信仰へのあくことのない情熱のみが、信念の人を生み出し育成しているのである。情熱的といわれるほどの信念、現実の生を内に限りなく痛み、本来的な生に立ち帰って生きんとする内なる願生心、――こういうものがアメリカの現地で仏教を語っていく場合に不可欠であることを知った。もしそのような信念や情熱が失われたならば、何もないわけである。歴史も伝統もなにもない。そのような視点からすれば、現在の日本の場合は、歴史と伝統という大きな甘えのうちにあって、本当に歴史と伝統を生かし切っているかどうか、大きな問題があると思った。

更に思われたことは、アメリカの教化そのものが大きな過渡期に来ているということである。つまり一世の時代が去って、二世、三世の時代であり、三世中心の時代が始まろうとしている。三世になれば、言語、思想、生活は全くアメリカ人である。そのような日系人社会に対する教化態勢をどのようにすればいいのか。否、時代はすでに日系人社会のみの問題ではない。米人の念仏者が生れ、米人の仏教研究者が生れつつある今日、伝道教化そのものを根本的

に考え直す時期に来ているといえよう。滞在中何回か御目にかかる機会をえて、その都度教えていただいたカリフォルニア大学（ノースリッヂ分校）目幸黙僊教授の、アメリカにはアメリカ固有の思索性があり、従ってそれにふさわしい伝道教化が必要であって、旧態そのままの真宗の移入であってはならないという言葉が、しきりに思われたことである。

日本の仏教のハワイへの移入は一八八七年であり、米本土への流入は一八九九年と言われている。ハワイにしても本土にしても、日本からの移民と共に仏教が入ったものであって、旧態そのままの真宗の移入であった。そして、移民に対する教化活動に力を注いだのは西本願寺であったことも、それら移民の多くの出身地が西本願寺の多い地方（広島、山口、熊本など）であったことから、容易に首肯されることである。従って、教化におくれた東本願寺にくらべて、西本願寺の教会及び開教使数は、凡そ前者の十倍であって、その教勢は殆んど全米に及んでいる。因みに西本願寺の教会数は、ハワイで約四十箇寺、本土で約六十箇寺、それに対して東本願寺の教会数は、ハワイで六箇寺、本土で三箇寺である。そして西本願寺の場合、開教使は日本より派遣された者もいるけれども、二世の人達が開教使となって、その中心的な役割を果していることは注目しなければならない。

西本願寺は既に早く一九一〇年代にアメリカに英語伝道部を設置し、若い世代の者や一般アメリカ人に対する伝道教化の姿勢をととのえたといわれ、また戦後バークレーに仏教研究所を設置し、米人や若い日系人の教育及び開教使養成に専念している。また更に、西本願寺では早くから翻訳課のようなものが設けられて翻訳事業に着手されているとも聞いている。これに反して東本願寺では、所属の教会数そのものが少ないというだけでなく、現地におけるそのような積極的な伝道教化のための組織づくりや体制づくりの姿勢が見られない。それは如何なる事情によるものであるかはわからないが、少くとも組織や体制の面では東本願寺は大きな遅れをとっていることは否定できない。そのような情勢のうちにあればこそ、数少い東本願寺の教会で仏法公開の事業に情熱を傾けて献身している現在の開教使

の努力に敬伏せざるを得ない。

教会の具体的な宗教活動は、日曜日の朝のサンディ・スクール、日曜講話、或は婦人会、青年会、壮年会、それに『歎異抄』を始めとするいくつかのスタディ・クラスと、一週間のスケジュールは極めて多い。その間に法要などの仏事が営まれるのである。仏教の伝道教化と同時に、如何にアメリカ人の生活のうちに滲透していくか、ということに多くの努力がはらわれている。従ってまた、そこにこそ現実的な多くの苦悩が出てくるのである。

そこで先ず今日に求められていることは、そのような教化体制や組織づくりも勿論であるが、更に急を要することは、聖典の翻訳を始めとする翻訳事業の促進である。真宗教義の難解性に悩んでいる二世・三世の人や米人のために、現地の仏教学者や開教使との緊密な連繋のもとに、英語による真宗教義の解明がなさるべきである。その場合に具体的には様々な困難な問題があると思う。用語の訳と解釈の問題、用語の英語表現の問題など。本願、念仏、信心、往生、浄土、廻向などの真宗用語のもつ難解性である。実際、このような根本語のもつ意味がなかなか明確に把握できないから、真宗よりも通仏教、つまりインド根本仏教へと向わざるを得ないのである。真宗用語の時代的なずれによる難解性を突破するには、その一々の言葉における実存的理解、主体的な領解が必要である。アメリカへの仏教の移出は、旧態そのままの真宗の移出であり、日本の仏教そのままの移出であったとするならば、それをもう一度内から再確認し実存的な領解にまで齎らしめることが必要であろう。

次に求められていることは、英語で仏教を、親鸞の信仰思想を公開することのできる人材を養成することである。これも緊急な課題である。しかもそのような人材を日本から派遣するだけでなく、二世・三世・更には四世の人々の中から養成するということが必要だと思われる。

今や我々は時代にもっと敏感にならなければいけない。今の仏教界に何が必要か、今の真宗教団に何が求められているか、――そういうことを背負うているのが大谷大学ではないか。そして何よりも親鸞教学の今日的な確かめとそ

の公開という、今の「時」に要請されている最も大切な課題を、我々は厳粛に受けとめなければならない。清沢満之以来の所謂近代をもった東本願寺が、また大谷大学が、どのような形でこれからのアメリカの伝道に積極的になるか。それは現在のアメリカにおいて仏教を求めている者の非常に大きな関心事であり、大きな期待である。清沢満之以来の近代の教学をもつ大谷大学が、それをどのような形でアメリカに、更には世界に公開するかということは、今やアメリカのみならず、全世界の関心事であるといえまいか。そのような意味において、これからの大谷大学の果すべき使命の大きさと、我々真宗人に課せられた使命と同時に、大谷大学の存立の意義を改めて深く思わしめられたことであった。

（昭和五十五年十二月十六日、真宗学会例会における発表の筆録を整理し加筆訂正していただいたものである。）